

近世における東北地方の庶民による 伊勢参宮の旅の歩行距離 — 旅日記（1691～1866年）の分析を通して —

谷 釜 尋 徳

Walking distances of Edo period Tohoku region commoners on Ise Shrine visitations
— An analysis of travel diaries (1691-1866) —

TANIGAMA Hironori

Summary

This research focuses on travel undertaken by commoners from the Tohoku region for the purpose of visiting Ise Shrine during the Edo period and clarifies the routes they walked, from departure from their residences to their return, and trends in the actual distances walked. It also elucidates the relationship between these walking journeys and the natural environment.

The conclusions reached are as follows.

The routes taken by commoners from the Tohoku region when walking to Ise Shrine during the Edo period are divided into three types : the “Kinki loop,” “extended Shikoku,” and “Fuji mountain-climbing package” types.

On average, they walked a distance of about 34.8 km per day, but on light days covered 10 km or less. On the other hand, they covered up to 60-70 km on heavy days, despite that the maximum that could be done without overexertion was about 50 km.

From 1691 to 1866, yearly fluctuations in the distances walked were not visible. Also, they maintained a steady pace from departure from their residences to return. Moreover, the distances they walked, and number and age composition of their fellow travelers, did not fluctuate.

Average temperatures on the Japanese archipelago during the Edo period were 2-5°C cooler. Therefore, the temperatures experienced by the Edo period commoners on the road would have felt cold to modern people.

Distances walked were not affected greatly by the weather, but as it is difficult to walk in rainy weather, long distances were more easily covered during good weather.

The length of the “daytime” hours during which travelers could walk on the roads was longest during the summer solstice at 15 hrs. 47 min., and shortest during the winter solstice, at 10 hrs. 57 min., providing an average time of 13 hrs. 21 min.

1. 問題の所在

移動手段に乏しい近世社会にあって、人間の陸上交通は主に徒歩によって果たされた¹⁾。そのため、遠隔地へ旅をする場合であっても、旅人は在地～目的地間の大半を歩いて移動しなければならなかった。それでは、長距離を徒歩で移動した彼ら旅人は、どのくらいのペース配分をもって毎日の道中を歩いていたのであろうか。近世旅行史をスポーツ史の視点から分析しようとした時、こうした歩行能力の問題が重要な課題として浮上してくる。

そこで本研究では、近世²⁾における庶民³⁾の伊勢参宮の旅に着目し、彼らの道中における「歩行距離」について明らかにすることにしたい。また、旅人の歩行距離を知るためには、彼らの在地出立から帰着までの足取りが明確になっていなければならない。そこで、歩行距離を解明する前提として、旅人が歩いた「ルート」についても検討を加えるものである。さらに、人間の運動はそれが行われる環境との関わりを無視しては成立し得ないとの観点から⁴⁾、本研究では旅人の歩行と「自然環境」との関連性についても併せて論及する。

ここで、本研究に先立って取り組まれた関連の諸研究を概観しておきたい。従来、近世旅行史に関する一般書においては、旅人の歩行距離が1日あたり10里（約39km）程度であったと記載されることが多く⁵⁾、これが通説として捉えられてきた。しかし、この歩行距離の値は、史料の詳細な分析を通して導き出されたものとは言い難く、再度検討する余地が認められる。

こうした観点から、近世後期の江戸及び江戸近郊地の庶民男性による伊勢参宮の旅日記（14編）を分析した研究によると、彼らの江戸～伊勢間の往路ルートにおける1日あたりの歩行距離は平均で約34.4kmであったという⁶⁾。また、対象を関東

地方一円にまで広げ、61編の旅日記を分析した試みでは、近世後期に当該地域に暮らした庶民男性の伊勢参宮においては、江戸～伊勢間の往路ルートの平均歩行距離は1日あたり約33.1kmであるとの数値が導き出されている⁷⁾。

しかしながら、先行研究がこれまで対象としてきたのは、関東地方一円から旅立った人々の歩行距離に限られており、その他の地域に暮らす庶民が旅の道中でどの程度の距離を歩いたのかという史実は、全く解明されてこなかったといわねばならない。これを受けて本研究では、近世については関東地方に次いで旅日記の残存数が多い東北地方⁸⁾を取り上げ、当該地域の庶民による伊勢参宮の旅を対象として考察するものとした。

検討のための基本史料として、本研究では東北地方の庶民が伊勢参宮の旅の道中で記した「旅日記」を用いた。ここでいう旅日記とは、旅程順に日付、天候、宿泊地、旅籠名、旅籠代、昼食代、間食代、訪問地とその若干のコメント、賽銭、渡船代、その他購入した品々の代金などが列記されたものであり、いわば金銭出納帳ないしは日誌的な性格の史料である⁹⁾。全ての旅日記にこれらの項目が漏れなく記されているわけではないが、そのいずれかについて記録されているとあってよい。

本研究では、蒐集した旅日記の中から通行した地名が詳述されている37編を抽出し、基本史料として取り扱うものとした（表1参照）。史料の地域別の内訳は、現在の福島県に該当する地域が11編、以下山形県が10編、宮城県が7編、岩手県が6編、秋田県が3編となる。なお、本研究において蒐集した史料の大半が男性による旅日記であったことから、対象とする性別は男性のみとした¹⁰⁾。

以上より本研究では、近世における東北地方の庶民による伊勢参宮の旅に着目して、彼らが①在

地出立から帰着までに歩いたルートと、②実際の歩行距離の傾向を明らかにし、③その歩行と自然環境との関連性についても検討するものである。

2. 東北地方の庶民による伊勢参宮ルートの類型

歩行距離を解明する前提として、ここでは東北地方の庶民による伊勢参宮ルートの類型化を試みる。37編の旅日記の内容から、本研究では東北地方からの伊勢参宮ルートを、近畿周回型、四国延長型、富士登山セット型の3つに類型化した。以下では、この3つのルートについて各々概説していきたい。

①近畿周回型

近畿周回型に該当する旅日記は、史料1～3, 5, 12, 13, 16, 31, 36, 37である。この類型の一事例として、『道中帳』（史料37）の旅の全行程を地図上に復元したものが図1である¹¹⁾。

在地から奥州道中に合流し、途中日光に参詣して江戸へ下る。そこから主に東海道と伊勢参宮道経由で伊勢参宮を果たした後は、熊野、高野山、奈良、大坂、京都などといった近畿の名立たる観光地を周回するため、「近畿周回型」と称した。

以降は、中山道を経て善光寺に至り、さらに新潟方面に進んで日本海沿岸を北上して東北に帰着している。

②四国延長型

四国延長型のルートを示す旅日記は多く、史料4, 6～11, 14, 15, 17, 18, 20～26, 28～30, 32～35がこれに該当する。図2は『伊勢参宮并熊野三社廻り金毘羅参詣道中道法附』（史料35）の全行程を地図上に示したものである。

在地出立後、近畿の観光地を周回するまでは上述の近畿周回型とほぼ同様のルートを歩くが、大

坂からは船（金毘羅船）で瀬戸内海を移動し四国の丸亀まで足を延ばす。原則として四国を周遊することはなく、金毘羅神社への参詣後は直ちに船で中国地方（岡山）に上陸し、山陽道で京都付近まで戻った後は、再び近畿周回型と概ね重なるルートで日本海側に出て北上して東北へ戻る。

なお、こうしたルートを採用したのは東北地方の庶民だけではなく、関東地方からの伊勢参宮においても、伊勢到着後に中国・四国地方まで足を延ばすケースは広く一般化していた¹²⁾。

③富士登山セット型

全体像としては近畿周回型か四国延長型のルートで旅をするが、江戸から東海道経由で西に向かう途中、主要幹線を一旦外れて富士登山を敢行し、その後再び沼津付近から東海道に合流して伊勢参宮の旅を続ける。このルートに該当するのは史料4, 12, 21, 29, 32, 36である。一事例として、『道中日記』（史料36）の全行程を図示した（図3参照）。

近世を通して、江戸を中心に関東地方からの富士登山が流行していたことは周知の通りであるが¹³⁾、本研究で蒐集した旅日記の中に富士登山の形跡が散見されることは、この当時の東北地方にも富士信仰が普及していた事実を示して余りある。

以上で確認したいずれの類型も、東北～伊勢間の最短ルートを往復するものではなく、伊勢到着後はさらに西に足を延ばし、往復路で異なるルートを選択していることがわかる。その理由の一つは、居住空間を越境することが稀な近世社会にあって、庶民は滅多にない旅の機会により多くの異文化に触れて見聞を広めようとしたことにあると推察しておきたい¹⁴⁾。

表1 旅日記の

No	表題	年代	著者名	年齢	在地（現在の地名）
1	道中付	1691	金子拾三郎		上小松村（山形県川西町）
2	道中日記	1743	菊池彦三郎		八沢木村（秋田県横手市）
3	伊勢参宮道中記	1768	中川清蔵		柏木目村（山形県高島町）
4	西国道中道法並名所泊宿附	1773	古市源蔵	29	宝坂村（福島県矢祭町宝坂）
5	参宮道中記	1777	今井幸七		高屋村（山形県寒河江市）
6	西国道中記	1783	白石三次		上大越村（福島県田村市大越）
7	伊勢参宮道中記	1786	大馬金蔵		泉崎村（福島県いわき市）
8	伊勢参宮所々名所並道法道中記	1794	阿部庄兵衛		佐沼町（宮城県登米市）
9	道中記	1799	残間庄吉		大谷成田村（宮城県大郷町）
10	遠州秋葉・伊勢参宮道中記	1805	円学院万宥		中伊佐沢村（山形県長井市）
11	御伊勢参宮道中記	1805	森居権左衛門		肝煎村（山形県庄内町）
12	伊勢道中記	1806	潤秀		長塚村（福島県双葉町）
13	伊勢参宮道中記	1811	忠左エ門		生駒矢島藩（秋田県由利本庄市）
14	道中記	1814	安ヶ平某氏		日詰郡山（岩手県紫波町）
15	伊勢参宮西国道中記	1818	佐藤幸右衛門		菅谷村（福島県田村市滝根町）
16	伊勢参宮道中記	1818	（著者不明）		柳沢村（山形県西川町）
17	伊勢参宮旅日記	1823	菊妓楼繁路		石巻（宮城県石巻市）
18	伊勢道中記	1826	藤四郎		清川口（山形県庄内町）
19	伊勢参宮花能笠日記 伊勢拜宮還録	1828	渡辺安治		寒河江（山形県寒河江市）
20	（表題不明）	1830	小林吉兵衛		利田村（福島県喜多方市）
21	道中記	1830	福士福弥		山田大沢（岩手県山田町）
22	（表題不明）	1831	（著者不明）		熊野村（山形県西川町）
23	万字覚帳	1835	渡辺権十郎		大城村（宮城県多賀城市）
24	道中日記	1836	黒沢佐助		米沢村（秋田県大仙町）
25	伊勢参宮道中日記帳	1841	物江安右エ門	54	大谷村（福島県磐梯町）
26	西国道中記	1841	角田藤左衛門	26	形見村（福島県石川町）
27	伊勢参道中の日記	1844	（著者不明）		富谷新町（宮城県仙台市）
28	道中記	1849	興助		沢内通大木原（岩手県西和賀町）
29	（表題不明）	1849	森右衛門		丸森村（宮城県丸森町）
30	（表題不明）	1849	（著者不明）		柳沢村（山形県西川町）
31	伊勢参宮道中記	1850	大和屋		南山保城小屋（福島県南会津町）
32	伊勢道中記	1853	幸七		湯本村（宮城県仙台市）
33	道中日記帳	1856	渡辺吉蔵	25	関本村（福島県南会津町）
34	道中記	1857	欠端某氏		福岡村（岩手県北上市）
35	伊勢参宮并熊野三社廻り 金毘羅参詣道中道法附	1859	福田福松		金田一村（岩手県二戸市）
36	道中日記	1860	坂路河内頭	67	坂路村（福島県石川町）
37	道中帳	1866	柴田栄太		鳥越村（岩手県一戸町）

基本情報

出典
『川西町史 上巻』川西町, 1979, pp.860-863
『大森町郷土史』大森町, pp.279-294
『高島町史 中巻』高島町, 1976, pp.652-660
『矢祭町史研究(2) 源蔵・郡蔵日記』矢祭町, 1979, pp.252-278
『寒河江市史編纂叢書 第23集』寒河江市教育委員会, 1977, pp.70-114
『大越町史 第二巻資料編Ⅰ』大越町, 1998, pp.993-1036
『天明六年伊勢参宮道中記』いわき地域学会出版部, 1993, pp.5-85
『伊勢参宮所々名所並道法道中記』阿部彰晤, 1992, pp.1-155
『大郷町史 史料編二』大郷町, 1984, pp.791-808
『長井市史 第二巻(近世編)』長井市, 1982, pp.875-891
『立川町史資料 第五号』立川町, 1993
『近世史資料』双葉町教育委員会, 1986, pp.142-159
『生駒藩史 讃岐出羽』矢島町公民館, 1976, pp.432-451
『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会, 2003, pp.103-129
『滝根町古文書調査報告4』滝根町教育委員会, 1986, pp.31-64
『西川町史編集資料 第十一号』西川町教育委員会, 1980, pp.45-62
『石巻の歴史 九巻 資料編3 近世編』石巻市, 1990, pp.524-559
『立川町史資料 第五号』立川町, 1993, pp.3-71
『寒河江市史編纂叢書 第23集』寒河江市教育委員会, 1977, pp.122-170
『会津高郷村史』高郷村, 1981, pp.337-404
『お伊勢参り』宮古郷土史研究会, 1972, pp.159-184
『西川町史編集資料 第十一号』西川町教育委員会, 1980, pp.62-83
『多賀城市史 第5巻 歴史史料(二)』多賀城市, 1985, pp.586-605
『中仙町郷土史資料 第三集』中仙町郷土史編さん委員会, 1974, pp.266-292
『会津高郷村史』高郷村, 1981, pp.337-407
『石川町史 下巻』石川町教育委員会, 1968, pp.193-238
『伊勢参宮 天保十五年辰年』富谷町古文書を読む会, 2008, pp.15-124
『沢内村史資料 第一集』沢内村教育委員会, 1986, pp.456-483
『伊勢参宮仕候御事』古文書で柴田町史を読む会, 2000, pp.2-296
『西川町史編集資料 第十一号』西川町教育委員会, 1980, pp.83-101
『日本庶民生活史料集成 20巻』三一書房, 1972, pp.497-519
『秋保町史 資料編』秋保町, 1975, pp.366-384
『田島町史 第4巻 民俗編』田島町, 1977, pp.875-915
『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会, 2003, pp.167-202
『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会, 2003, pp.219-252
『石川町史 下巻』石川町教育委員会, 1968, pp.248-258
『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会, 2003, pp.253-302

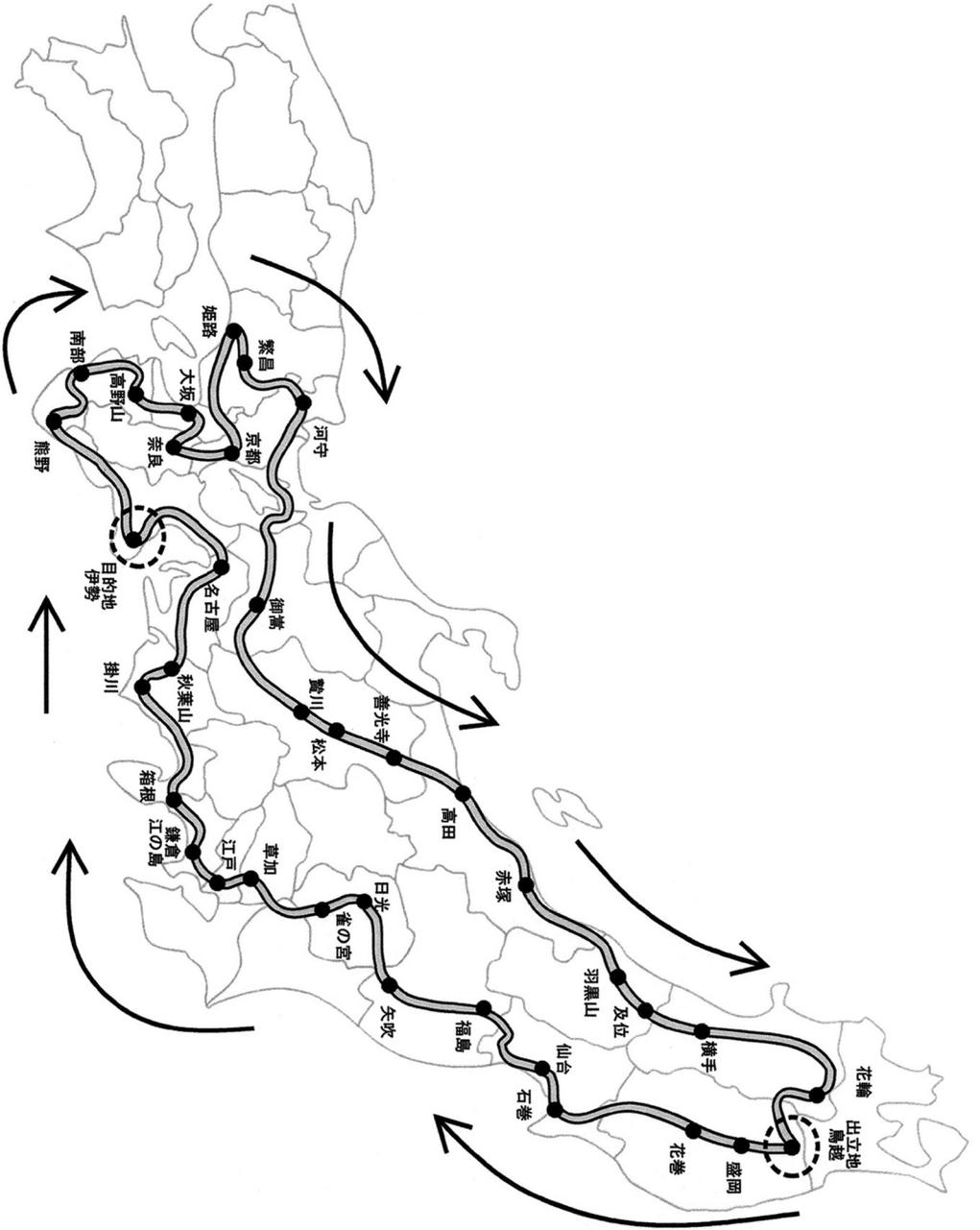


図1 近畿周回型のルートの一例

柴田栄大『道中帳』(1866)『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会, 2003, pp.253-302, より作成。

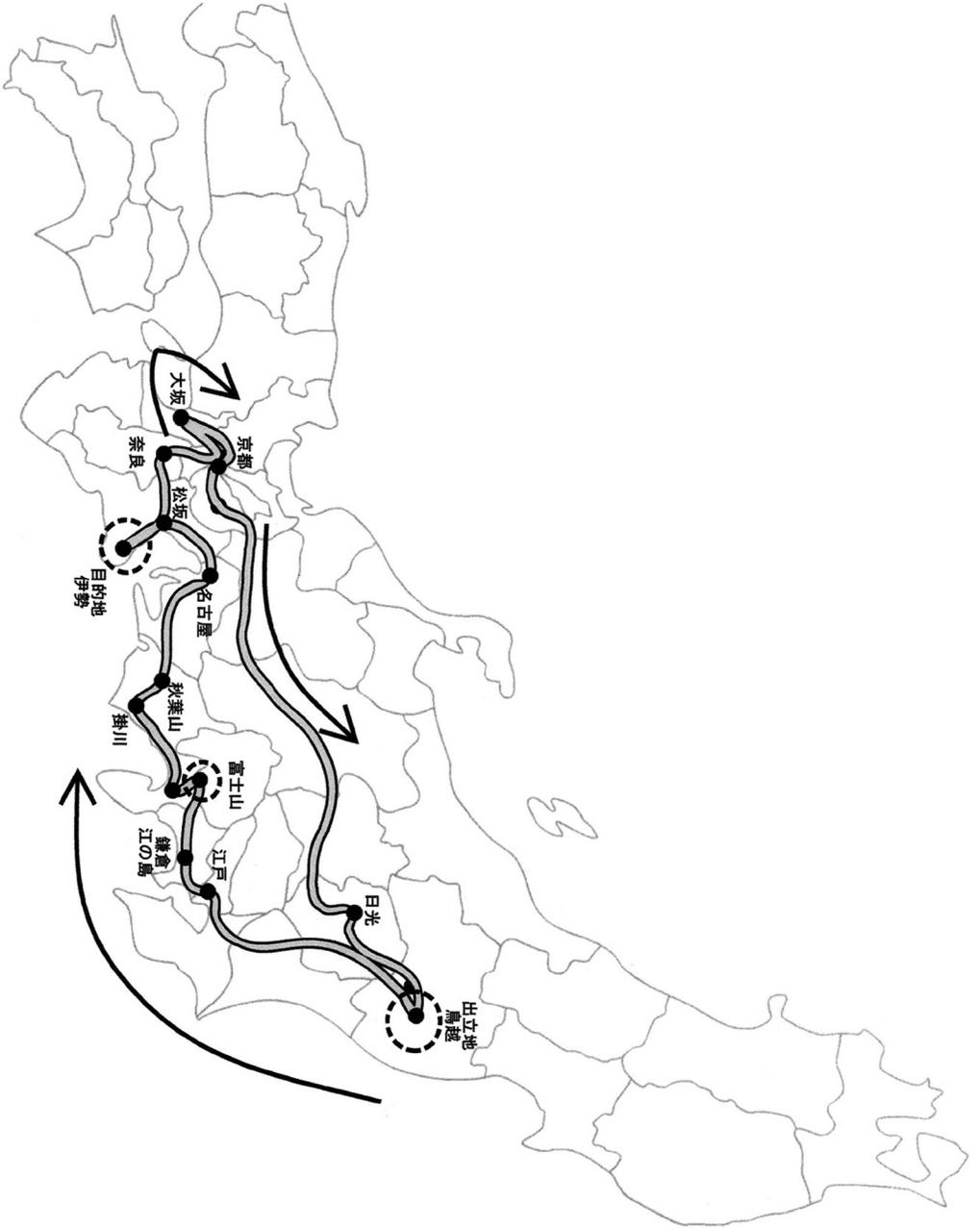


図3 富士登山セツト型のルートの一例
坂路河内頭「道中日記」(1860)『石川町史 下巻』石川町教育委員会, 1968, pp.248-258, より作成。

表2 近世における東北地方の庶民

No	表題	年代	旅の期間 (月・日)	ルート の類型	同行者	日数(日)			
						総日数	計測 日数	距離 不明	逗留
1	道中付	1691	1.30~4.2	近	10	59	48	0	11
2	道中日記	1743	4.19~6.14	近	6	86	71	2	13
3	伊勢参宮道中記	1768	12.17~2.23	近	10	60	55	1	4
4	西国道中道法並名所泊宿附	1773	5.25~8.20	四+富	34	84	73	9	2
5	参宮道中記	1777	11.28~3.3	近		95	86	1	8
6	西国道中記	1783	2.6~6.27	四	4	142	100	37	5
7	伊勢参宮道中記	1786	2.4~6.17	四	5	124	73	8	43
8	伊勢参宮所々名所並 道法道中記	1794	1.16~4.16	四		90	73	7	10
9	道中記	1799	6.27~9.21	四		77	67	3	7
10	遠州秋葉・伊勢参宮道中記	1805	11.11~1.11	四		60	54	2	4
11	御伊勢参宮道中記	1805	1.10~3.18	四		67	52	2	13
12	伊勢道中記	1806	6.13~7.27	近+富		44	40	0	4
13	伊勢参宮道中記	1811	閏2.20~5.15	近	22	84	66	4	14
14	道中記	1814		四		86	80	2	4
15	伊勢参宮西国道中記	1818	10.21~1.25	四	11	93	84	7	2
16	伊勢参宮道中記	1818	12.2~2.2	近		62	54	1	7
17	伊勢参宮旅日記	1823	1.6~4.3	四		86	68	7	11
18	伊勢道中記	1826	1.14~4.15	四	6	92	79	5	8
19	伊勢参宮花能笠日記 伊勢拜宮還録	1828	1.18~5.14	その他	4	115	70	35	10
20	(表題不明)	1830	1.9~閏3.8	四	9	86	78	1	7
21	道中記	1830	3.15~7.15	四+富	10	110	57	33	20
22	(表題不明)	1831		四		66	56	2	8
23	万字覚帳	1835	2.5~5.2	四	12	75	65	6	4
24	道中日記	1836	1.26~4.29	四	6	90	75	1	14
25	伊勢参宮道中日記帳	1841	1.5~3.10	四	9	96	74	5	17
26	西国道中記	1841	12.11~2.8	四	12	85	73	3	9
27	伊勢参道中の日記	1844	2.11~6.3	その他	8	106	57	11	38
28	道中記	1849	1.26~4.29	四		79	74	3	2
29	(表題不明)	1849	6.27~10.3	四+富	7	95	74	6	14
30	(表題不明)	1849	10.15~1.9	四	13	83	69	6	8
31	伊勢参宮道中記	1850	1.9~3.17	近	11	63	59	0	4
32	伊勢道中記	1853	5.24~8.9	四+富	21	75	64	5	6
33	道中日記帳	1856	2.1~4.17	四	20	73	49	12	12
34	道中記	1857	1.25~5.15	四		109	90	11	8
35	伊勢参宮并熊野三社廻り 金毘羅参詣道中道法附	1859	2.9~5.29	四	4	104	82	13	9
36	道中日記	1860	7.6~9.27	近+富	2	65	57	4	4
37	道中帳	1866	1.7~4.16	近		96	92	1	3

※「ルートの類型」の記号：近→近畿周回型／四→四国延長型／富→富士登山セット型

による伊勢参宮の旅の歩行距離*

歩行距離 (km)				歩行距離別の日数(日)							
総距離	平均	最長	最短	～10km	10km台	20km台	30km台	40km台	50km台	60km台	70km台
1819.1	37.9	66.3	7.8	2	1	6	15	19	4	1	0
2641.1	37.2	59.8	4.6	2	1	14	23	21	10	0	0
1892.4	34.4	54.1	11.6	0	5	12	22	11	5	0	0
2691.1	36.9	69.0	11.7	0	10	11	21	19	10	2	0
2829.0	32.9	46.4	7.4	2	6	20	39	19	0	0	0
3018.7	30.2	58.6	7.8	4	17	26	31	17	5	0	0
2173.2	29.8	63.1	3.9	4	10	20	26	10	2	1	0
2439.2	33.4	56.7	5.8	3	7	15	28	17	3	0	0
2285.8	34.1	53.1	7.6	1	6	13	26	18	3	0	0
1898.5	35.2	58.1	7.8	2	6	4	24	13	5	0	0
1837.4	35.3	60.6	11.7	0	9	8	18	10	6	1	0
1307.6	32.7	52.6	11.7	0	3	11	21	3	2	0	0
2105.8	31.9	51.5	7.8	2	4	21	23	13	3	0	0
2773.9	34.7	59.7	6.3	1	7	19	26	19	8	0	0
3014.3	35.9	67.9	9.7	1	5	13	37	23	4	1	0
2074.0	38.4	56.9	11.7	0	2	5	20	21	6	0	0
2939.6	43.2	74.5	19.3	0	6	9	19	27	6	0	1
2944.3	37.3	58.5	5.3	3	3	13	20	27	13	0	0
2582.3	36.9	58.0	7.8	1	6	13	17	24	9	0	0
2583.2	33.1	61.8	6.0	4	7	16	30	20	0	1	0
2127.1	37.3	61.2	11.6	0	6	6	22	17	3	3	0
1996.6	35.7	65.5	11.7	0	7	11	20	14	2	2	0
2139.9	32.9	53.6	7.8	3	4	11	32	13	2	0	0
2737.4	36.0	71.9	11.2	0	7	10	28	22	5	2	1
2424.1	32.8	58.9	7.8	2	9	18	24	15	6	0	0
2717.1	37.2	67.5	9.7	1	3	10	33	19	6	1	0
1854.0	32.5	66.1	3.9	3	10	11	12	17	3	1	0
2594.4	35.1	56.7	7.8	2	5	11	35	18	3	0	0
2740.0	36.2	75.0	4.9	1	8	15	25	15	7	1	1
2413.7	35.0	63.1	15.5	0	2	18	27	17	4	1	0
1890.5	32.0	52.3	10.5	0	12	11	27	8	1	0	0
2423.2	37.9	56.5	11.7	0	5	12	16	24	7	0	0
1661.4	33.9	54.8	2.1	3	6	7	15	13	5	0	0
3174.8	35.3	74.3	6.1	1	8	20	30	25	3	2	1
2861.2	34.9	70.8	9.2	1	6	21	33	13	6	1	1
1633.5	28.7	59.7	7.8	2	12	15	21	4	3	0	0
3169.7	34.4	54.2	7.8	3	9	16	33	29	2	0	0

3. 東北地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離

ここでは、先に明らかにしたルート上を、東北地方の庶民がどのようなペースで歩いたのかを「距離」に着目して考察するものである。本研究における歩行距離の算出は、次の方法によった。

まずは、本研究において取り上げた37編の旅日記の内容から、多くの旅人が実際に歩いた主要な街道を図4に整理した¹⁵⁾。図中のいずれかの街道を歩いて東北から伊勢まで辿り着き、さらにいずれかの街道を経由して東北まで歩いて帰着したのである。

次いで、各々の街道筋における宿場の配置とその間隔（距離）を明らかにした¹⁶⁾。その上で、多くの旅日記には、毎日の道中において通過および宿泊した宿場の名称が記されているので、当日出発した宿場から宿泊した宿場までの距離を足していくことで、1日あたりの歩行距離を求めるという方法を使った¹⁷⁾。

①歩行距離の平均値と総歩行距離

表2は、37編の旅日記の分析結果より、在地出発から帰着までの総歩行距離、1日平均の歩行距離、1日に歩いた最長および最短の距離等々を掲載したものである。上記の方法をもって計算したところ、東北地方の庶民による1日平均の歩行距離は約34.8kmであった。冒頭で述べたように、これまで近世の旅人の歩行距離は1日に10里（約39km）程度として把握されてきたが、本研究の条件設定に限れば、平均的な歩行距離は通説よりも若干短かったと指摘されよう¹⁸⁾。

表中の「総歩行距離」の欄は、各々の旅日記が示す総移動距離から徒歩で移動した分を通算したものである。これによると、多くの史料において全行程の総歩行距離が2000kmをゆうに上回ってお

り、平均では約2389.4kmとなる。なお、37編の旅日記のうちで最も長い距離を歩いているのは、『道中記』（史料34）の約3174.8kmであった。

②距離別にみた歩行距離の割合

表2の「歩行距離別の日数」の欄は、日毎の歩行距離を10km単位で区切り、各々の距離の範囲に該当する日数を記載したものである。37編の旅日記を総合して、距離別にみた歩行距離の割合を算出すると、一桁台が約2.1%、10km台が約9.5%、20km台が約19.4%、30km台が約36.5%、40km台が約24.7%、50km台が約6.6%、60km台が約0.9%、70km台が約0.2%であった。

このように、庶民の1日あたりの歩行距離の割合は、平均値に近い30~40km台に集中しているものの、少ない日には一桁~10km台の場合もある一方で、多い日には60~70km台に達していたことがわかる。

③歩行距離の上限

近世の東北地方の庶民にとって、1日あたりの歩行距離の上限はどの辺りにあったのであろうか。

本研究が対象とした旅日記のうち、1日に最も長い距離を歩いたのは、嘉永2（1849）年に丸森村（現・宮城県丸森町）から旅をした森右衛門である（史料29）。この旅は、先の類型のうち「四国延長型」と「富士登山セット型」を併せたルートを通行しているが、大坂~二子村間で75.0kmもの距離を歩いた形跡が確かめられる¹⁹⁾。1日に70km程度を歩き通すことは、当時としては不可能な数値ではなかったのである²⁰⁾。

漆原村（現・福島県西会津町）の須藤万次郎は、元治2（1865）年に伊勢参宮の旅を行った際に『伊勢詣同行定』という同行者間の取り決めを書き残している。そこには、項目のひとつとし

て、日々の道中の歩行距離は10里（約39km）を目安とし、それが12里（約46.8km）ないしは13里（約50.7km）にまで及びそうな場合は、同行者間での相談が必須である旨の戒めが記されている²¹⁾。

先に示した歩行距離の距離別の割合をみると、1日に60～70km台を歩いているものを足しても、全体のわずか1%に過ぎない。ゆえに、東北地方の庶民にとって、1日に60km以上もの距離を歩くことは、長期間におよぶ道中において極めて稀なケースであったといわねばならない。このことから推察するに、彼らにとっての無理のない歩行の上限とは、上述の取り決めが示すように50km程度のところに求めることができよう。

④歩行距離の年次の推移

表2より、本研究が分析の対象とした旅日記（1691～1866年）における歩行距離の年次の推移を検討してみると、1日平均の歩行距離、最短歩行距離、最長歩行距離の数値に目立った年次的な傾向は見られないことがわかる。したがって、東北から伊勢参宮の旅をする場合、道中での歩行のペース配分はおよそ近世を通じて変わらなかったといえよう。

⑤通行ルートと歩行距離との関係

ルートの違いが歩行距離に及ぼした影響を探るべく、先に示した3つの類型ごとに歩行距離の平均値を求めてみると、近畿周回型が約34.1km、四国延長型が約35.2km、富士登山セット型が約35.0kmとなり、そこに明確な違いを見出すことはできなかった。どの種類のルートを選んだとしても、毎日の歩行距離には一定のペースが保たれていたことがわかる。

⑥日数の経過と歩行距離との関係

道中における日数の経過が歩行距離に及ぼした影響を知る目的で、各々の旅日記の道中を10日単位で区切り、10日毎の平均歩行距離の推移を検討した（表3参照）。日数を重ねるごとに疲労が蓄積していくことを思えば、旅の序盤と終盤とでは歩行可能な距離にも自ずと差異が生じた可能性が想定されるためである。

しかし、いずれの旅日記においても、日数の経過とともに歩行距離が大きく変動している様子は見られない。東北地方の庶民は、在地を出立してから帰着するまでの間、概ね一定のペースを保って歩き続けたのである。

⑦同行者数と歩行距離との関係

ここでは、旅の同行者数の多寡が道中の歩行距離に及ぼした影響を探ってみたい。同行の集団が大規模になるほどに動きが鈍くなり、歩行の進度が停滞したのではないかと考えたためである。

近世に東北地方から伊勢参宮の旅を企てる場合、講²²⁾を組織するなどして集団で旅立つケースが多かった。本研究で蒐集した旅日記の中から、同行者数が判明している24編の情報を抜き出して整理したものが表4である。同行者数は最少で2人（史料36）、最多で34人（史料4）となるが、24編を平均すると1つの集団につき約10.7人が連れ立って歩いていた計算となる。

次いで、表4において各資料が示す同行者数と歩行距離とを比較してみると、そこには明確な相関関係は見られない。本研究が取り上げた旅においては、同行者数の多寡が日々の歩行距離を大きく左右することはなかったといえよう²³⁾。

⑧同行者の年齢構成と歩行距離との関係

同行者の年齢構成と歩行距離との関係を検討すべく、当該の情報が判明している5編の旅日記を基に表5を作成した。

表3 日数の経過と

No	表題	年代	歩行距離 (km)				総日数 (日)	日数の経過		
			総距離	平均	最長	最短		～10日	～20日	～30日
1	道中付	1691	1819.1	37.9	66.3	7.8	59	37.4	39.2	33.8
2	道中日記	1743	2641.1	37.2	59.8	4.6	86	37.5	39.6	40.7
3	伊勢参宮道中記	1768	1892.4	34.4	54.1	11.6	60	29.7	32.5	33.3
4	西国道中道法並名所泊宿附	1773	2691.1	36.9	69.0	11.7	84	44.7	42.1	29.9
5	参宮道中記	1777	2829.0	32.9	46.4	7.4	95	30.8	33.0	33.1
6	西国道中記	1783	3018.7	30.2	58.6	7.8	142	24.6	24.7	37.5
7	伊勢参宮道中記	1786	2173.2	29.8	63.1	3.9	124	35.7		20.4
8	伊勢参宮所々名所並 道法道中記	1794	2439.2	33.4	56.7	5.8	90	31.1	25.2	29.5
9	道中記	1799	2285.8	34.1	53.1	7.6	77	35.8	30.0	34.8
10	遠州秋葉・伊勢参宮道中	1805	1898.5	35.2	58.1	7.8	60	37.8	34.9	39.6
11	御伊勢参宮道中記	1805	1837.4	35.3	60.6	11.7	67	22.8	33.1	36.8
12	伊勢道中記	1806	1307.6	32.7	52.6	11.7	44	33.0	20.9	34.9
13	伊勢参宮道中記	1811	2105.8	31.9	51.5	7.8	84	27.1	37.9	32.5
14	道中記	1814	2773.9	34.7	59.7	6.3	86	29.4	37.1	36.0
15	伊勢参宮西国道中記	1818	3014.3	35.9	67.9	9.7	93	34.0	35.6	36.2
16	伊勢参宮道中記	1818	2074.0	38.4	56.9	11.7	62	34.3	38.6	36.6
17	伊勢参宮旅日記	1823	2939.6	43.2	74.5	19.3	86	31.4	31.6	37.2
18	伊勢道中記	1826	2944.3	37.3	58.5	5.3	92	27.1	37.1	33.7
19	伊勢参宮花能笠日記 伊勢拜宮還録	1828	2582.3	36.9	58.0	7.8	115	27.3	33.5	
20	(表題不明)	1830	2583.2	33.1	61.8	6.0	86	20.9	30.6	38.0
21	道中記	1830	2127.1	37.3	61.2	11.6	110	32.2	41.1	33.6
22	(表題不明)	1831	1996.6	35.7	65.5	11.7	66	32.7	33.8	34.9
23	万字覚帳	1835	2139.9	32.9	53.6	7.8	75	23.7	25.6	32.8
24	道中日記	1836	2737.4	36.0	71.9	11.2	90	28.9	35.3	36.9
25	伊勢参宮道中日記帳	1841	2424.1	32.8	58.9	7.8	96	30.2	31.9	35.5
26	西国道中記	1841	2717.1	37.2	67.5	9.7	85	35.6	38.9	37.6
27	伊勢参道中の日記	1844	1854.0	32.5	66.1	3.9	106	29.9	22.6	59.2
28	道中記	1849	2594.4	35.1	56.7	7.8	79	28.9	36.6	31.8
29	(表題不明)	1849	2740.0	36.2	75.0	4.9	95	31.1	36.2	39.1
30	(表題不明)	1849	2413.7	35.0	63.1	15.5	83	38.2	31.1	31.9
31	伊勢参宮道中記	1850	1890.5	32.0	52.3	10.5	63	27.4	32.6	36.3
32	伊勢道中記	1853	2423.2	37.9	56.5	11.7	75	33.3	39.4	43.6
33	道中日記帳	1856	1661.4	33.9	54.8	2.1	73	25.7	27.7	32.3
34	道中記	1857	3174.8	35.3	74.3	6.1	109	31.5	30.0	28.4
35	伊勢参宮并熊野三社廻り 金毘羅参詣道中道法附	1859	2861.2	34.9	70.8	9.2	104	38.1	35.2	34.4
36	道中日記	1860	1633.5	28.7	59.7	7.8	65	29.1	19.1	37.6
37	道中帳	1866	3169.7	34.4	54.2	7.8	96	26.6	38.9	30.1

※「10日毎の平均歩行距離」の欄では、該当する日数の範囲において

歩行距離との関係*

10日毎の平均歩行距離 (km)											
～40日	～50日	～60日	～70日	～80日	～90日	～100日	～110日	～120日	～130日	～140日	～150日
33.4	41.1	46.3									
34.4	33.6	34.1	40.0	41.4	32.9						
31.3	40.4	38.8									
31.6	32.4	36.3	42.0	45.2							
28.5	24.0	35.8	35.8	35.9	37.3	36.5					
31.6	30.8	35.6	30.3	33.7	25.0	11.1	20.9	23.6	37.3	33.4	38.0
31.6	30.4	28.6	15.5	24.0	19.9	27.3	34.3	32.5	31.1		
35.7	38.3	35.0	35.4	37.1	33.9						
29.0	42.8	37.9	29.9	39.3							
27.7	37.7	32.9									
33.1	42.0	35.9	42.4								
29.4	36.0										
26.4	27.1	31.2	34.4	33.9	37.8						
33.3	30.9	37.6									
32.1	35.4	37.5	35.3	31.9	43.6	41.2					
36.5	38.9	46.0	35.1								
35.6	38.1	34.8	42.2	49.3	40.0						
39.3	34.6	39.1	42.1	42.9	44.6						
29.7	35.2	45.1	36.8	37.5	41.0	47.0	39.3	41.9			
28.8	34.5	32.8	39.9	40.9							
33.9	42.3	斜線	37.7	44.9	43.8	22.2	44.5				
30.2	35.8	41.7	39.8								
34.4	37.6	34.7	37.5	40.9							
40.6	38.8	27.8	36.8	43.8	40.6						
30.0	26.7	33.6	43.4	32.6	38.5	18.3					
35.9	33.2	36.8	39.7	37.6	38.0						
26.2	28.7	23.2		11.7	40.8	40.5	39.9				
36.2	31.4	35.1	41.3	37.3							
26.9	48.1	48.8	32.3	41.8	34.2	25.4					
33.4	29.6	42.9	39.6	37.6	32.5						
26.3	33.0	34.4	19.5								
30.9	39.5	40.6	39.0	30.4							
28.6	34.4	44.0	44.0	27.5							
40.1	36.6	27.5	35.5	40.2	38.9	39.4	39.5				
34.0	26.9	34.1	34.2	41.0	36.5	35.6					
22.4	37.8	32.0	29.9								
34.9	30.5	34.4	37.4	35.4	38.7	35.2					

逗留などを理由に歩行移動の形跡が確認できない場合は斜線を付した。

表4 同行者数と歩行距離との関係

No	表題 (年代)	同行者数	歩行距離(km)/日		
			平均	最長	最短
1	道中付 (1691)	10人	37.9	66.3	7.8
2	道中日記 (1743)	6人	37.2	59.8	4.6
3	伊勢参宮道中記 (1768)	10人	34.4	54.1	11.6
4	西国道中道法並名所泊宿附 (1773)	34人	36.9	69.0	11.7
6	西国道中記 (1783)	4人	30.2	58.6	7.8
7	伊勢参宮道中記 (1786)	5人	29.8	63.1	3.9
13	伊勢参宮道中記 (1811)	22人	31.9	51.5	7.8
15	伊勢参宮西国道中記 (1818)	11人	35.9	67.9	9.7
18	伊勢道中記 (1826)	6人	37.3	58.5	5.3
19	伊勢参宮花能笠日記 伊勢拝宮還録 (1828)	4人	36.9	58.0	7.8
20	不明 (1830)	9人	33.1	61.8	6.0
21	道中記 (1830)	10人	37.3	61.2	11.6
23	万字覚帳 (1835)	12人	32.9	53.6	7.8
24	道中日記 (1836)	6人	36.0	71.9	11.2
25	伊勢参宮道中日記帳 (1841)	9人	32.8	58.9	7.8
26	西国道中記 (1841)	12人	37.2	67.5	9.7
27	伊勢参道中の日記 (1844)	8人	32.5	66.1	3.9
29	不明 (1849)	7人	36.2	75.0	4.9
30	不明 (1849)	13人	35	63.1	15.5
31	伊勢参宮道中記 (1850)	11人	32	52.3	10.5
32	伊勢道中記 (1853)	21人	37.9	56.5	11.7
33	道中日記帳 (1856)	20人	33.9	54.8	2.1
35	伊勢参宮并熊野三社廻り 金毘羅参詣道中道 (1859)	4人	34.9	70.8	9.2
36	道中日記 (1860)	2人	28.7	59.7	7.8

表5 同行者の年齢構成と歩行距離との関係

史料No	4	25	26	30	33	
史料名	西国道中道法並名所泊宿附	伊勢参宮道中日記帳	西国道中記	不明	道中日記帳	
年代	1773年	1841年	1841年	1849年	1856年	
歩行距離	平均	36.9km	32.8km	37.2km	35.0km	33.9km
	最長	69km	58.9km	67.5km	63.1km	54.8km
	最短	11.7km	7.8km	9.7km	15.5km	2.1km
同行者数	34人	9人	12人	13人	20人	
年齢構成	10代	0人	0人	1人	0人	1人
	20代	6人	3人	6人	3人	3人
	30代	1人	4人	3人	7人	2人
	40代	0人	1人	0人	3人	0人
	50代	0人	1人	2人	0人	5人
	不明	27人	0人	0人	0人	9人
平均年齢	27.3歳	35.2歳	30.9歳	34.4歳	39歳	
最年長	38歳	54歳	54歳	41歳	56歳	
最年少	22歳	21歳	18歳	23歳	18歳	
同行者名簿 (年齢)	古市源蔵 (29)	折笠伝左工門 (36)	角田伝助 (28)	兵蔵 (31)	星柳山 (56)	
	陣野林七 (25)	折笠米松 (28)	角田庄吉 (18)	長次郎(41)	星久吾 (51)	
	陣野庄五郎 (22)	鈴木徳右工門 (27)	角田恒重 (21)	与惣吉(33)	星豊治 (30)	
	金沢与七 (24)	五十嵐藤蔵 (21)	角田長蔵 (21)	与助 (38)	奈良屋長右衛門(53)	
	片野惣助 (28)	神田八右工門 (43)	角田藤左衛門(26)	佐太郎(33)	奈良屋定兵衛 (29)	
	手元幸七 (25)	神田孫右工門 (38)	有賀佐重 (32)	市松 (36)	京屋金八 (18)	
	谷地長十 (38)	斎藤善蔵 (31)	本郷彦之丞 (31)	善之丞(39)	京屋治兵衛 (36)	
		斎藤半左工門 (39)	遠藤恒八 (29)	福太郎(41)	伊勢屋半兵衛 (53)	
		物江安右工門 (54)	鈴木善右衛門(51)	佐門 (29)	室井重左衛門 (50)	
			藤田利平 (32)	三次 (23)	渡部吉右衛門 (28)	
			金沢庄之助 (28)	利兵衛(41)	渡部吉蔵 (25)	
			白石八十八 (54)	源之丞(33)	奈良屋幸七 (?)	
				忠吉 (29)	松下屋清助 (?)	
					菓子屋善兵衛 (?)	
					三ツ田屋留四郎(?)	
					細井善四郎 (?)	
				染屋孫右衛門 (?)		
				細井徳右衛門 (?)		
				細井おきし (?)		
				細井おくま (?)		

表6 山家村の農民男性の平均余命（1760～1870年）

（単位：歳）

年齢	平均余命	到達年齢	年齢	平均余命	到達年齢
0	36.8	36.8	45	21.2	66.2
1	46.8	47.8	50	17.6	67.6
5	49.3	54.3	55	14.8	54.3
10	47.8	57.8	60	12.0	72.0
15	43.8	58.8	65	9.6	74.6
20	40.1	60.1	70	7.2	77.2
25	36.4	61.4	75	6.3	81.3
30	33.1	63.1	80	4.9	84.9
35	29.4	64.4	85～	3.5	88.5～
40	25.1	65.1			

木下太志『近代化以前の日本の人口と家族』ミネルヴァ書房，2002，p.102より作成。

表によると、最年少は18歳（史料26，33）で最年長は56歳（史料33）である。同行者のメンバーの中には、10～50代の男性が含まれているが、その年齢構成によって歩行距離の平均値が増減している様子は確かめられない。例えば、平均年齢が最も低いのは史料4（平均27.3歳）であるが、この旅の歩行距離は他の4つの史料と比べて目立った数値ではないからである。したがって、ここに取り上げた史料に限って言えば、近世の東北地方の庶民は、同行者の年齢構成に関わらず、道中において一定の距離を歩いていたといえよう²⁴⁾。

ところで、本研究で取り上げた旅の構成メンバーの高年齢層は50代であったが、この年齢層は近世社会の感覚に照らすとどのように位置づけられるのであろうか。歴史人口学の分野では、近世日本の一般的な出生時平均余命（平均寿命）は、17世紀には20代後半から30代前半、18世紀には30代半ば、19世紀になっても30代後半の水準にとどまっていたとされている²⁵⁾。この研究成果によると、50代男性とは平均寿命を遥かに上回る稀有な

長老であったことになろう。

しかしながら、この数値は近世社会の農村において子供の死亡率、とりわけ5歳以下の乳幼児死亡率がきわめて高かったことに起因しており²⁶⁾、当時代の平均余命は死亡率の高い年齢層を無事に乗り切ると比較的長くなる傾向にあった。これを東北地方の一農村を事例として見てみよう。

表6は、宝暦10（1760）年から明治3（1870）年の期間において、出羽国村山郡山家村（現・山形県天童市）に暮らした農民男性の各年齢層の平均余命を整理したものである。

一覧表によると、乳幼児死亡率の高い時代の平均余命は、出生時（0歳時）こそ30代に止まっているものの、5歳程度を過ぎれば50代に到達するところとなり、さらには70～80代まで存命する長寿者も確かにいたことがわかる。だからといって、乳幼児期を超えれば、必ずしも50代までの生存が約束されていたわけではなかった。

山家村の「死亡のスケジュール」を検討の俎上に乗せた木下によれば、当該村落では5歳まで生

表7 近世日本の気候変動

気候名称	元和・寛永小氷期		元禄・宝永小氷期			寛政・天保小氷期		
気候区分	第1小氷期	第1小間氷期	第2小氷期		第2小間氷期	第3小氷期		
年代	1610～1650頃	1650～1690頃	1690～ 1720頃	1720～ 1740頃	1740～ 1780頃	1780～ 1820頃	1820～ 1850頃	1850～ 1880頃
気候	非常に寒冷	温暖	非常に寒冷	寒冷	温暖	寒冷	非常に寒冷	寒冷

根本順吉「歴史気候学の進展」『週刊朝日百科 日本の歴史87 近世Ⅱ』朝日新聞社，1987，p.307より作成。

き延びるのは出生者全体の3分の2程度で、さらに40歳時点では生存者は当初の半分まで減少し、晴れて60歳の還暦を迎えるのは3分の1、70歳に到達するのは当初の僅か2割であったという²⁷⁾。したがって、本研究で取り扱う旅の構成メンバーとなっていた50代男性とは、ある程度の自然淘汰を潜り抜けた体力面で選りすぐりの人々で、なおかつ当該年代に到っても連日の長距離歩行に耐え得る最低限の健康体を維持していた人々であった可能性が指摘されよう。

4. 道中の歩行と自然環境との関連性

以上より、近世の東北地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行に関する諸情報が明らかとなった。次いで、彼らの長距離歩行の前提条件として、人為的には操作し得ない自然環境との関連性を確認してみることにはしたい。

①近世日本の気候条件

歴史気候学の研究成果によると、日本の近世に相当する期間は、地球規模で見れば気候ベースとしては現代よりも寒冷な時代であったと指摘されている²⁸⁾。また、屋久杉の年輪の成長と炭素同位対比から気温の変動を推算した研究では、近世日本の気温を現代と比べると、温暖な時期でも2℃、最も寒冷な時期では5℃も近世の方が低かったと結論付けられている²⁹⁾。なお、本研究で取り上げる東北地方の気候は、とりわけ近世後期

には冬は寒冷多雪、夏は冷涼多雨であったという³⁰⁾。

表7は、近世日本の気候変動を一覧にして整理したものである。本研究で用いた旅日記の年代は、大半が18世紀後半以降であるが、当時の旅人は気候区分の上では「第3小氷期」に相当する寒冷な時代に連日の長距離歩行を敢行していたことがわかる。この時期には、江戸でも隅田川が複数回に及んで氷結するなど、冬季には酷寒が続いていたという³¹⁾。近世庶民の旅は、農事暦とも関わって農閑期である冬季に出掛けることが一般化していたため、本研究が取り上げた旅の道中とは現代人が想像するよりも寒かったと推察することができよう。

②道中の天候と歩行距離との関連性

ここでは、道中の天候と旅人の歩行距離との関連性を確認することにはしたい。

本研究が拠り所とする旅日記の著者の中に、道中の天候をつぶさに記録した人物がいた。文政11(1828)年に村山郡寒河江(現・山形県寒河江市)から伊勢参宮の旅をした渡辺安治である。

表8は、彼の手による旅日記(史料19)から天候に関する記述を抽出し、毎日の歩行距離を併記したものである。そこには、「晴」「曇」「雨」といった単純な表記にとどまらず、「昨夜大雨、暁方霽、終日大風ニ而晴に成る」³²⁾「宵より雨、四ツ(午前9時頃—引用者注)過霽間もなく又雨降」³³⁾

表8 道中の天候と歩行

月日	区間	歩行距離	天候の記述	月日	区間
1月18日	寒河江～上山		暁晴，五ツ頃ちらちら雪降	2月26日	～森町
1月19日	～湯ノ原		晴	2月27日	～秋葉山
1月20日	～上戸沢	23.4km	暁方より雪吹，午刻頃，霧，ちらちら雪少し	2月28日	～大野
1月21日	～福島	30.4km	朝，雪降，四ツ頃ち晴，春風ニて寒し	2月29日	～大木
1月22日	～本宮	29.9km	晴，八ツ頃ちらちら雪後雪吹ニなる	3月1日	～池鯉鮒
1月23日	～須賀川	24.5km	本宮ニ而朝見れば三寸程雪降，朝ちらちら雪，春風寒し，壹里程来れハ雪なし，四ツ頃ち晴	3月2日	～名古屋
				3月3日	～桑名
1月24日	～白河	21.1km	晴	3月4日	～関
1月25日	～いおふの村	19.3km	晴	3月5日	～草津
1月26日	～高内	34.0km	晴		
1月27日	～日光	35.9km	晴	3月6日	～京都
1月28日	逗留		暖晴	3月7日	逗留
1月29日	～板橋		八ツ過雨，後雪ニ成ル	3月8日	逗留
1月30日	～出流	42.9km	暖晴	3月9日	逗留
2月1日	～岩船	25.3km	四ツ半頃ち雨	3月10日	逗留
2月2日	～杉戸	34.6km	晴，春風寒し	3月11日	逗留
2月3日	～江戸	31.2km	晴	3月12日	逗留
2月4日	逗留		晴	3月13日	逗留
2月5日	逗留		晴	3月14日	逗留
2月6日	逗留		晴	3月15日	逗留
2月7日	逗留		晴	3月16日	～奈良
2月8日	逗留		少し曇，七ツ頃雨	3月17日	～伊賀上野
2月9日	逗留		曇，暮六ツ時夜中雨	3月18日	～松坂
2月10日	逗留		霧，昼過迄快晴ニ成る	3月19日	～伊勢
2月11日	逗留		晴	3月20日	逗留
2月12日	逗留		晴	3月21日	逗留
2月13日	逗留		晴	3月22日	～仁柿
2月14日	逗留		昼雨	3月23日	～あかはね
2月15日	逗留		晴	3月24日	～吉野
2月16日	逗留		(記述なし)	3月25日	～高野山
2月17日	逗留		(記述なし)	3月26日	逗留
2月18日	逗留		晴	3月27日	～八軒や
2月19日	～神奈川	27.4km	昼頃雨後霧ル	3月28日	～吹飯
2月20日	～江の島	24.8km	暖晴	3月29日	～堺
2月21日	～大磯	21.3km	晴	3月30日	～大坂
2月22日	～湯本	19.5km	夕辺八ツ時頃雨後霧，廿二日暁晴，昼頃ち雷雨	4月1日	～西宮
2月23日	～沼津	23.2km	晴	4月2日	～高砂
2月24日	～江尻	45.8km	少し曇，八ツ半頃ち雨	4月3日	～斑鳩
2月25日	～久能山	16.1km	少し曇	4月4日	～香登

渡辺安治「伊勢参宮花能笠日記」「伊勢拜宮還録」(1828)『寒河

距離との関連性

歩行距離	天候の記述	月日	区間	歩行距離	天候の記述
58.0km	晴	4月5日	～下村	55.5km	快晴
31.1km	晴	4月6日	～金毘羅		晴八ツ時、雨
40.7km	昨夜大雨、暁方霽、終日大風ニ而晴に成る	4月7日	～下村		曇四ツ過り雨、九ツ時霽天気ニ成
27.2km	晴	4月8日	～二本松	39.2km	晴
31.7km	曇九ツ頃雨、八ツ過着	4月9日	～片島	56.7km	晴
25.4km	昨夜七ツ頃雨、明方霽、後快晴	4月10日	～高砂	35.1km	晴
37.9km	晴	4月11日	～大坂		晴
40.0km	少し曇	4月12日	逗留		晴
52.4km	昨夜暮頃より五日四ツ半迄雨降霽、又九ツ頃より八ツ半頃迄雨、後霽ニなる	4月13日	船中		晴
		4月14日	～京都		(記述なし)
26.2km	昨夜雨、明六ツ半時霽、又九ツ時より雨降	4月15日	逗留		晴
	晴	4月16日	逗留		明方より雨
	曇、九ツ過り小雨	4月17日	逗留		晴
	晴	4月18日	～武佐	31.3km	晴
	晴	4月19日	～木ノ下	51.5km	晴
	七ツ頃雨	4月20日	～府中	56.5km	晴
	昼より雨	4月21日	～永平寺	39.0km	晴
	晴	4月22日	～いぶり橋	49.2km	朝雨、五ツ頃晴ニ成る
	曇、昼過雨	4月23日	～金沢	40.9km	晴
	晴、八ツ時大雨、後霽	4月24日	～高岡	46.8km	晴
41.6km	暖晴	4月25日	～魚津	44.3km	晴
35.1km	快晴	4月26日	～砺波	47.5km	晴
58.5km	晴	4月27日	逗留		雨天故逗留
19.5km	少し曇、五ツ過着	4月28日	～有間川	47.7km	晴
	暁より雨天	4月29日	～関川	46.8km	晴
	終日風雨	5月1日	～牟礼	42.9km	曇
35.1km	朝小雨、四ツ過り暖晴と成る	5月2日	～高田	48.7km	宵より雨、四ツ頃より天気ニ成ル
46.8km	暖晴	5月3日	～柏崎	52.7km	晴
45.5km	晴	5月4日	～長岡	34.8km	晴
42.0km	晴、暮近く雨	5月5日	～大野		曇、暮頃雨、嵐ニ成ル
	雨	5月6日	～新潟	7.8km	宵より雨、四ツ過霽間もなく又雨降
45.2km	晴	5月7日	～菅谷	47.6km	晴
23.4km	曇七ツ頃船中ニ而雨、間も無く霽	5月8日	～川口	40.7km	曇、四ツ頃より雨降
	曇九ツ時天気	5月9日	～黒沢	31.8km	終日雨
11.7km	晴	5月10日	～赤湯	45.8km	霽、次第ニ晴ニ成ル
19.5km	晴	5月11日	逗留		(記述なし)
43.9km	晴	5月12日	逗留		(記述なし)
42.0km	晴、七ツ時雨降	5月13日	～山形	31.2km	(記述なし)
50.7km	晴	5月14日	～寒河江	48.6km	(記述なし)

江市史編纂叢書第23集』寒河江市教育委員会，1977，pp.122-170より作成。

表9 二十四節気からみた歩行可能な時間

二十四節気	旧暦の時期	新暦の月日 (2014年)	明六つ の時刻	暮六つ の時刻	歩行可能な時間 (明六つ～暮六つ)
立春正月節	1月前半頃	2月4日	6:03	17:47	11時間44分
雨水正月中	1月後半頃	2月19日	5:53	17:58	12時間5分
啓蟄二月節	2月前半頃	3月6日	5:30	18:16	12時間46分
春分二月中	2月後半頃	3月21日	5:09	18:29	13時間20分
清明三月節	3月前半頃	4月5日	4:47	18:41	13時間52分
穀雨三月中	3月後半頃	4月20日	4:27	18:54	14時間27分
立夏四月節	4月前半頃	5月5日	4:09	19:07	14時間58分
小満四月中	4月後半頃	5月21日	3:56	19:19	15時間23分
芒種五月節	5月前半頃	6月6日	3:49	19:30	15時間41分
夏至五月中	5月後半頃	6月21日	3:49	19:36	15時間47分
小暑六月節	6月前半頃	7月7日	3:55	19:36	15時間41分
大暑六月中	6月後半頃	7月23日	4:05	19:29	15時間24分
立秋七月節	7月前半頃	8月7日	4:17	19:15	14時間58分
処暑七月中	7月後半頃	8月23日	4:29	18:58	14時間31分
白露八月節	8月前半頃	9月8日	4:41	18:36	13時間55分
秋分八月中	8月後半頃	9月23日	4:54	18:13	13時間19分
寒露九月節	9月前半頃	10月8日	5:05	17:52	12時間47分
霜降九月中	9月後半頃	10月23日	5:18	17:33	12時間15分
立冬十月節	10月前半頃	11月7日	5:32	17:17	11時間45分
小雪十月中	10月後半頃	11月22日	5:47	17:07	11時間20分
大雪十一月節	11月前半頃	12月7日	6:01	17:04	11時間3分
冬至十一月中	11月後半頃	12月22日	6:11	17:08	10時間57分
小寒十二月節	12月前半頃	1月5日	6:15	17:17	11時間2分
大寒十二月中	12月後半頃	1月20日	6:13	17:31	11時間18分

橋本万平『日本の時刻制度 増補版』塙書房, 1966, pp.132-133
 国立天文台編『理科年表 平成26年』丸善出版, 2013, p.3より作成。

のように、時系列で天候の推移を詳述する例も散見され、著者が道中の空模様を気にかけていた様子が見て取れる。

それでは、道中の天候の善し悪しは、旅人が歩く距離に影響を及ぼすことがあったのであろうか。表8を通覧してみると、天候と歩行距離との間に明確な相関関係を認めることはできない。しかしながら、4月27日に帰路の砺波（現・富山県砺波市）で逗留した際に「雨天故逗留」³⁴⁾と記述されたように、雨天が道中の歩行を妨げる一要因

となっていたことは容易に想像がつく³⁵⁾。また、旅行時の履物として定着していた「草鞋」が水分に弱く、雨天時には頻繁に交換する必要があったことからしても³⁶⁾、道中で雨が降ると歩く距離を延ばし難かったのであろう。

一方、表中で50km以上の長距離を歩いた日の天候は「晴」「快晴」などと付されており、史料上はすべて晴天であったことになる。偶然の一致である可能性は否めないが、晴天時には長い距離を歩きやすかったと考えることができよう。

③昼夜の長さとは歩行距離との関連性

現代とは異なり街灯設備に乏しい近世にあっては、主要幹線でも日没後の歩きは慣例として厳禁であった。このことは、文化7（1810）年刊行の『旅行用心集』にも「一通の旅にて格別に急くことなくば夜道決而すべからず³⁷⁾と戒められている。

他にも、旅の同行者間で定めた取り決めの中で同様の注意書きが認められている場合がある。東北地方から例を取れば、「日の内にはやく宿をかるべし³⁸⁾」「夜ハ暮ぬ内ニ取様ニ心掛朝ニは闇内ニ喰事をいたし夜の明を待可相立事³⁹⁾」「夜道無用之事⁴⁰⁾」「朝晩の夜道等をゆたんすべからし⁴¹⁾」などといった具合である。

このように、近世の旅行案内書や同行者間の取り決めにおいて、夜道の歩行を戒める旨の記述が頻繁に見られることからすれば、旅人が歩行可能な時間とは、1日のうちで「夜」を除く時間帯であったといえよう。ここに、道中の歩行が自然条件によって自ずと規定されていた好例を確認することができる。いうまでもなく、昼夜の長さは年間を通して一定ではなく季節によって漸次変動するため、以下では暦の検討によってこの問題を解明してみたい。

ここでいう「歩行可能な時間」とは、上述した各種の戒めにおける「夜」を除外した「昼」の時間帯のことを意図している。したがって、当時代の基準に照らして昼夜の境目が明確になれば、自ずと歩行可能な時間が浮かび上がってくることになろう。その基準を得るべく前出の『旅行用心集』を紐解くと、同書には「一年晝夜長短六ヨリマデの大畧^{りやく}」という項目が設けられていることがわかる⁴²⁾。つまり同書では、近世の不定時法における「明六つ」と「暮六つ」を基準として昼夜が分かたれているのである。『旅行用心集』が旅人を含む多くの人々に読まれたことに鑑み、

本研究でも便宜的に明六つから暮六つまでの間が歩行可能な「昼」の時間帯であったと捉えるものとする。

表9は、二十四節気⁴³⁾を新暦（2014年版）の月日に当てはめ、該当する明六つと暮六つの時刻を記載し、さらに明六つから暮六つまでの「昼」の時間の長さをもって「歩行可能な時間」を算出したものである。各々の二十四節気に対応する時刻については橋本の研究成果⁴⁴⁾を参考にし、2014年版の暦については『理科年表⁴⁵⁾』に依拠した。なお、この時刻は江戸を対象としているため、他地域の場合はこれと若干異なることを断っておきたい。

表によって、年間を通して変動する「歩行可能な時間」を知ることができる。最長は夏至の15時間47分、最短は冬至の10時間57分で、平均すると13時間21分の「昼」の時間が確保されていたことになる。本研究で取り上げた近世の東北地方の庶民は、この時間的制約の範囲内で1日平均約34.8kmの距離を歩んでいったのである。

しかしながら、表2において、比較的日照時間の長い季節にかかる旅の事例（史料2，4，9，12，21，29，32，36など）を見ても、歩行距離の数値がとりわけ高いわけではない。ゆえに、年間の昼夜の長さが旅人の歩行距離に大きな影響を及ぼした可能性は低いといわねばならない。

5. 結び

本研究における検討の結果は、以下の通りである。

近世における東北地方の庶民が歩いた伊勢参宮ルートは、「近畿周回型」「四国延長型」「富士登山セット型」の3つに類型化された。彼らの1日あたりの歩行距離は、平均すると約34.8kmであったが、少ない日には一桁～10km台になることもあった。一方、多い日には歩行距離が60～70km台

に達することもあったが、無理のない歩行の上限はおおよそ50km程度であった。また、彼らの歩行距離には明確な年次的推移は見出されなかった。さらに、彼らの旅とは、歩くルートや日数の経過に関わらず、道中の全行程を通して概ね一定のペースを保って歩き通すものであった。その他、旅の同行者数や年齢構成によって歩行距離が変化することはなかったと推察された。

近世の日本列島の気温は現代よりも2～5℃程度低かったため、庶民が歩いた道中は現代人の感覚からすると比較的寒かったと推察された。また、天候の善し悪しが道中の歩行距離に大きな影響を及ぼすことはなかったが、雨天時には長距離を歩きにくく、晴天時は距離を延ばしやすかったことが示唆された。さらに、旅人が道中で歩いたとされる「昼」の時間帯の長さは、年間のうち最長で夏至の15時間47分、最短で冬至の10時間57分であり、平均すると13時間21分が確保されていたが、この昼夜の長さが歩行距離を大きく左右したという傾向は見られなかった。

【付記】

本研究は科学研究費助成事業・基盤研究（C）の助成を受けて行われた。

課題番号：25350784

課題名：近世後期における東北地方の庶民男女による旅の歩行距離に関する研究

研究代表者：谷釜尋徳

<注記及び引用・参考文献>

- 富永祐治『交通における資本主義の発展』岩波書店、1953、p.21
- 日本史研究における「近世」とは通常、天正18（1590）年に豊臣秀吉が全国を統一した時点から、慶応3（1867）年の大政奉還までを指すと考えられている（高木昭作・守屋毅『江戸時代』『平凡社日本史事典』平凡社、2001、pp.76-88）。本研究における「近世」も一般史の時代区分（1590～1867）に倣うものであるが、取り扱う37編の旅日記の年代幅を考慮すると、実際の研究対象期間は元禄4（1691）年から慶應2（1866）年までとなる。
- 「庶民」という文言は、『社会科学事典』において「貴族などにたいして普通の人々」「支配階層にたいしては支配される被支配者層」「大部分は生産者」などと定義づけられている（桜井庄太郎「庶民」『社会科学事典』鹿島研究所出版会、1971、p.365）。本研究における「東北地方の庶民」とは、現在の東北地方に該当する地域に居住し、貴族・武士層を除く階層のもの全てを包括する広い概念として捉えるものである。
- ゲナーは運動学的な見地から「スポーツ運動は、その運動課題に運動が行われる場所をも含めているときにしか、包括的には理解できない」（ゲナー著、佐野淳・朝岡正雄監訳『スポーツ運動学入門—スポーツの正しい動きとは何か—』不昧堂出版、2003、p.73）と指摘する。また、井上は歴史学の立場から、「歴史は、環境のもとに織りなされるのである。環境を知らなければ、個人の行動を理解することはできない。」（井上勲「日本史の環境」『日本の時代史29 日本史の環境』吉川弘文館、2004、p.6）と言及している。同じく歴史学者の福井も「人間の社会が刻んできた歴史の展開は、空中楼阁のように宙に浮いていたわけではない。それぞれの社会が位置していた場所の、きわめて具体的な環境諸条件のなかで、それらの条件によって枠づけられ、また他方ではそれらの条件に働きかけて改変しながら、現実の姿をとってきたのが歴史である。」（福井憲彦『歴史学入門』岩波書店、2006、p.25）との見解を示し、広義の「環境」に着目することの重要性を説いている。
- 吉田健一「日本人の体力」『國學院大學体育学研究室紀要』2号、1970、pp.11-21／増永正幸「日本人の生活様式に関する科学的考察」『國學院大學体育学研究室紀要』18号、1986、pp.19-28／今井金吾『江戸の旅—東海道五十三次物語—』河出書房新社、1988、p.140／今井金吾『江戸の旅風俗—道中記を中心に—』大空社、1997、pp.38-39／齊藤俊彦『轍の文化史—人力車から自動車への道—』ダイヤモンド社、1992、pp.61-78／齊藤俊彦『くるまたちの社会史—人力車から自動車まで—』中央公論社、1997、pp.30-39／金森敦子『江戸庶民の旅—旅のかたち・関所と女—』平凡社、2002、p.24／金森敦子『伊勢詣と江戸の旅—道中日記に見る旅の値段—』文藝春秋、2004、p.9／金森敦子『“きよのさん”と歩く江戸六百里』バジリコ、2006、p.5／菅井靖雄『こんなに面白い江戸の旅—東海道五十三次ガイドブック—』東京美術、2001、p.9／菅野俊輔『図解 江戸の旅は道中を知るとこんなに面白い』青春出版社、2009、p.8／石川英輔「数字で読む江戸時代の東海道」『歩きたくなる大名と庶民の街道物語』新人物往来社、2009、pp.154-162
- 谷釜尋徳「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際—江戸及び江戸近郊地の庶民による伊勢参宮の旅を中心に—」『スポーツ史研究』20号、2007.3、pp.1

-22

- 7) 谷釜尋徳「近世後期における関東地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離—旅日記(1768~1881年)の分析を通して—」『東洋大学スポーツ健康科学紀要』8号, 2011.3, pp.33-54
- 8) ここでいう「東北地方」とは、現在の広域行政区分において青森県・秋田県・岩手県・山形県・宮城県・福島県の6県に該当する地域を想定している。これは、古代~近世において事実上用いられていた「令制国」の区分に照らすと陸奥国(青森県・岩手県・宮城県・福島県・秋田県)と出羽国(山形県・秋田県)に概ね該当する地域となる。一言に「東北地方」といっても、その面積は広域におよび、日本海側と太平洋側では気候風土にも相違点が認められる。しかしながら、近世の旅に関しては、旅のルート、期間、歩行距離など様々な点において共通点が見出せることを理由に、本研究では「東北地方」をひとつのまとまりを持った地域として捉え、これを研究対象とした。
- 9) 田中智彦「道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣」『交通史研究』49号, 2002.3, pp.19-20
- 10) 一方、近世における女性の旅の歩行距離については、旅日記の分析から1日平均で約30.4kmであったとする研究がある(谷釜尋徳「近世後期における庶民女性による旅の歩行距離について—紀行文及び旅日記を手掛かりとして—」『体育史研究』27号, 2010.3, pp.33-45)。
- 11) 本研究においてルートを地図上に復元するにあたっては、近世の旅を現代の視点からイメージしやすくすべく、地図上の境界線は現行の広域行政区画とした。なお、ルートの詳細な復元にあたっては、弘化3(1846)年刊行の『改正増補大日本國順路明細記大成』を主な拠り所とした(山崎久作『改正増補大日本國順路明細記大成』和泉屋市兵衛, 1846)。当該史料は、日本全国の街道筋が地図上に多色刷りで網羅されており、各街道における宿場間の距離の情報を漏れなく知ることができるからである。
- 12) 小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—」『筑波大学人文地理学研究』14号, 1990.3, pp.231-255
- 13) このことについては、以下の研究に詳しい。
岩科小一郎『富士講の歴史—江戸庶民の山岳信仰—』名著出版, 1983/青柳周一『富嶽旅百景—観光地域史の試み—』角川書店, 2002
- 14) この傾向は、近世後期の旅行案内書『旅行用心集』の中に「東国の人ハ伊勢より大和, 京, 大坂, 四国, 九州迄も名所, 旧跡, 神社, 仏閣を見回り, 西国の人ハ伊勢より江戸, 鹿島, 香取, 日光, 奥州松島, 象潟, 信州善光寺迄拝ミ回らんことを願ふなり。」(八隅蘆庵『旅行用心集』須原屋茂兵衛伊八, 1810, 1丁)という一節があることから推して、東北地方のみならず当時行われた旅全般に広く見られたといえよう。また、近世後期の随筆作家である喜多村信節の『嬉遊笑覧』に、当時の旅の傾向として「神佛に参るハ傍らにて遊樂をむねとす。伊勢は順路なれば, かならず参宮す。」(喜多村信節『嬉遊笑覧』(1830)『嬉遊笑覧』近藤出版部, 1887, p.199)と記されていることと併せて考えると、彼らにとって信仰は口実であって、旅の真の目的は道中の異文化に触れて楽しむことに求められていたといわねばならない。
- 15) ルートの詳細な復元にあたっては、『改正増補大日本國順路明細記大成』を主な拠り所とした。こうした街道筋の整備や宿場の設置は、庶民の長距離歩行の旅を可能にした大きな要因として数えることができる。
- 16) 宿場間の距離を明らかにするにあたっては、『改正増補大日本國順路明細記大成』の記述内容を拠り所とした。
- 17) ただし、この方法によって明らかにされた歩行距離は、主要な街道を外れることなく歩いた場合の数値であって、途中脇道にそれて名所旧跡等に立ち寄った分の距離は反映されていない。なお、現在の距離単位への換算は、1里=36町=約3.9km, 1町=60間=約109mで計算している。
- 18) 平均値は必ずしも当時の実情を反映するものではないが、1日平均の歩行距離が10里(約39km)に達している旅日記は、37編中わずか1編(史料17)のみであった。
- 19) 森右衛門「(表題不明)」(1849)『伊勢参宮仕候御事』古文書で柴田町史を読む会, 2000, pp.2-296
- 20) 本研究が取り上げた旅日記のうち、最長歩行距離が70km台に達しているものは5編(史料17, 24, 29, 34, 35)確認することができる。また、山川菊栄が幕末期の藤沢の男性に対して実施した聞き取り調査によると、古老の懐古談として「私も若いころには足が達者でね、一日に十七、八里(約66.3~70.2km—引用者注)は平気でしたよ。日の短けえころ、朝、藤沢を出て横浜まで使いにいった、夕方、日の暮れねえうちに帰って来てね。」(山川菊栄「雲助の東海道」『わが住む村』岩波書店, 1983, p.23)との発言が確認される。
- 21) 当該の記述は、次の通りである。「道中之義は十里を限り可致候事。若し十二・十三里にも及候はば仲間能々談事之上にて可致候事。」(須藤万次郎「伊勢詣同行定」(1865)『会津高郷村史』福島県耶麻郡高郷村, 1981, p.336)
- 22) 「講」とは一般に「宗教上・経済上その他の目的のもとに集まった人々が結んだ社会集団」(仲村研「講」『日本史大事典 第二巻』平凡社, 1993, p.12)と定義づけられている。庶民が個人負担で旅にかかる費用を工面することが困難であった近世においては、集団で旅費を出し合い数人を代参させる講の形式が好まれ、これを「代参講」と称した。とりわけ、伊勢参宮を目的とする集団は「伊勢講」、富士登山の場合は「富士講」などといった。

- 23) 近世後期の街道では、同行者数に応じた歩き方の隊形が交通マナーとして定着しており、横に広がらないような工夫がなされていたとの研究成果がある(谷釜尋徳「近世後期における庶民の旅の集団歩行に関する研究」『東洋大学スポーツ健康科学紀要』9号, 2012.3, pp.41-62)。
- 24) だからといって、同行者間での相互の配慮が全くなかったわけではない。角掛村(現・岩手県奥州市)の久松が嘉永3(1850)年の伊勢参宮時に書き留めた『伊勢参宮道中記』には、同行者間での取り決めが添え書きされており、その一項目として「足よわキ人ニ用しゃ有べし」(久松「伊勢参宮道中記」(1850)『江刺の古文書(六)』江刺市岩谷堂公民館, 1992, p.19)と明示されている。また、文政6(1823)年に石巻から伊勢へ旅した菊妓楼繁路も、出立にあたって認めた『参宮の旅人十三カ条心得事』の中で「足のよはき人に荷物をようしゃ有べし」(菊妓楼繁路(1823)「参宮の旅人十三カ条心得事」『石巻の歴史 第九卷』石巻市, 1990, p.524)と定めている。東北地方の庶民は、移動手段たる「脚」に不安を持つ同行者に配慮しながら毎日の道中を歩いてきた可能性がある。
- 25) 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社, 2000, p.177
- 26) 鬼頭宏「歴史人口学における死亡動態」『生存と死亡の人口学』原書房, 2004, p.34
- 27) 木下太志『近代化以前の日本の人口と家族—失われた世界からの手紙—』ミネルヴァ書房, 2002, pp.105-106
- 28) 根本順吉「歴史気候学の進展」『週刊朝日百科 日本の歴史87 近世II』朝日新聞社, 1987, p.306
- 29) 北川浩之・松本英二「屋久杉年輪の炭素同位体比変動から推定される過去2000年間の気候変動」『気象研究ノート191号』日本気象学会, 1988, pp.7-10
- 30) 鈴木秀夫『気候変化と人間—1万年の歴史—』原書房, 2004, p.394
- 31) 根本順吉『江戸晴雨致』中央公論社, 1993, pp.53-56
- 32) 渡辺安治「伊勢参宮花能笠日記」(1828)『寒河江市史編纂叢書 第23集』寒河江市教育委員会, 1977, p.135
- 33) 渡辺安治「伊勢拜宮還録」(1828)『寒河江市史編纂叢書 第23集』寒河江市教育委員会, 1977, p.163
- 34) 渡辺安治「伊勢拜宮還録」(1828)『寒河江市史編纂叢書 第23集』寒河江市教育委員会, 1977, p.159
- 35) 『伊勢参宮道中記』(史料7)にも、「大雨ニテ難義仕悪敷道也」(湯川~野中間)「大雨ニ而難義仕候」(善光寺付近)とあり、大雨が道中の大きな妨げとなっていた模様が看取される(大馬金蔵「伊勢参宮道中記」(1786)『天明六年伊勢参宮道中記』いわき地域学会出版部, 1993, p.43, p.78)。
- 36) 谷釜尋徳「近世後期の庶民の旅と草鞋」『東洋法学』53巻2号, 2009.12, p.17
- 37) 八隅蘆庵『旅行用心集』須原屋伊八, 1810, 7丁
- 38) 「参宮の旅人十三カ条心得事」(1823)『石巻の歴史 第九卷 資料編3 近世編』石巻市, 1990, p.524
- 39) 「道中日記帳」(1856)『田島町史 第4巻 民俗編』田島町, 1977, p.875
- 40) 「覚」(1844)『伊勢参宮』富谷町古文書を読む会, 2008, p.15
- 41) 「道中拾五ヶ条心得の事」(1849)『伊勢参宮仕候御事』古文書で柴田町史を読む会, 2000, p.4
- 42) 八隅蘆庵『旅行用心集』須原屋伊八, 1810, 39丁
- 43) 「二十四節気」は『大辞林』において「太陰太陽暦で季節を正しく示すために設けた暦上の点。一太陽年を24等分し、立春から交互に節気・中気を設け、それぞれに名称を与えた。例えば、一月節気を立春、一月中気を雨水、八月中気を秋分などと呼ぶ。」(松村明編『大辞林 第三版』三省堂, 2006)と説明されている。
- 44) 橋本万平『日本の時刻制度 増補版』塙書房, 2002, pp.132-133
- 45) 国立天文台編『理科年表 平成26年』丸善出版, 2013, p.3